

中西輝政著「日本人が知らない世界と日本の見方」PHP 研究所 2011 年 10 月 4 日刊を読む

日本文明が生き残るために

1. 「and the rest」の道

- (1)これが日本の凋落していく大きな流れと軌を一にします。1990 年頃のことで、ここから日本の凋落が急速に始まりました。
- (2)やはり「一番でなくてもいい」と思えば、二番、三番にも留まることもできなくなるというのが人間の世界でしょう。「一番でなくていい」と思うと、たちどころに 10 番、20 番になる。それが世界秩序というものです。これは受験競争でもわかりますね。やはり「トップをめざす」「すべて自前のシステムを使う」「外国におんぶに抱っこはごめんだ」と思える国しか、興隆はしません。
- (3)あなた方はもう知らないと思いますが、高度成長期の日本では、何に関しても必ず「世界一の国になるんだ」という気概を持っていました。戦争で負けてボロボロになったけれど、日本はそれだけのポテンシャルを持った国だ、という根底的自信はあったと思います。
- (4)国家として成り立つために、いまの日本はいつの間にか何か根源的なものをなくしているのです。あるいは「別に大国にならなくてもいい」と考えるようになっていく。「一超多強」というけれど、第三グループになるという道もある。第三グループとは国際政治的にはまさに「その他大勢」で、「and the rest」です。「rest」つまり休めるのですから、ゆっくりのんびり、優しくやっていく。国際社会の大衆庶民になろうというわけで、たしかにそういう国家像もあり得ます。

2. 「多強」に残るために歯をくいしばって粘る

- (1)こうして見ると、いまの日本には二つの選択肢があります。一つはもう頑張らず、第三グループに脱落してもよいのではないかと、いうもの。もう一つは、やはりそれではダメで、「一超」は無理だとしても、「多強」つまり第二グループには何としても残るんだ、と歯をくいしばって粘るというもの。
- (2)「多強」になるために、日本も独自の GPS を持つ、あるいは核開発や核武装も考えるべきだという議論ですから、これはたしかに覚悟が要ります。あるいは日本独自にミサイル防衛を行い、軍事予算も増やす。その他のことでも、アメリカに完全な「おんぶに抱っこ」はやめよう、先端技術もみんな日本で特許を取っていこう、というわけです。これは下手をすると、危険なナショナリズムとも見なされます。ですから、アメリカとの調整も大切なチャレンジの一つとなるでしょう。

3. 地球市民社会は出来上がるか

- (1)結局、今後世界はどうなっていくのでしょうか。そのかなりの部分は、インターネットの普及と関わってくるでしょう。インターネットの世界も、各国家の言語、個別民族文化と深く関わっています。たとえば中国語のネット空間は、日本語のネット空間に比べ、ものすごく使いやすくなっています。人工衛星「北斗」も備え、各種の検索エンジンが急速に普及してくるでしょう。
- (2)日本はやがてアメリカの GPS 依存をやめて、中国の「北斗」を使ったカーナビや検索エンジンを採用することになるかもしれません。となると、これはもうアメリカとは別の文化圏に入ることになるかもしれない。日本は太平洋ではなく、東シナ海に属することになるでしょう。

- (3) その意味でいま日本は重要な分かれ道にあると思いますが、一方で「そんなことはたいした問題ではない」という見方もあります。たしかにグローバル化はいつか終わるかもしれないが、現実「国境を越える社会」ができている、すでに現状そのものがグローバル化の成果の一つだ、というわけです。
- (4) 政治や国家、宗教などを取り上げるから対立要因ばかり目につくけれど、それとは違う社会が生まれており、すでに現実としての「グローバル社会」がある以上、もう一度後戻りすることはあり得ない。その意味で「グローバリゼーションの終わり」は成功物語の結末なのだ、という議論です。
- (5) 「地球市民社会」という言い方もあります。日本のマスコミは、こういう議論が大好きですね。『朝日新聞』だけでなく、大マスコミはテレビも新聞も、こういうイメージで語りたがります。すでに地球市民社会が出来上がっていて、今後はこれをより充実させていくことが一つの課題だ、というわけです。
- (6) 「グローバリゼーションの終わり」を喧伝する人は政治や経済、あるいは文明や文化、言語といった人類社会を分ける要素ばかり注目するからそんなことをいうのであって、目を転じれば、そんなものとは無関係に国際結婚は増えているし、留学生もお互いに行き交い、国境を越えた一つの社会がもう完全に出来上がっている、あるいは一市民同士がインターネットを介して国籍など関係なく、自由に対話しているではないか。
- (7) したがってすでに地球市民社会はできている、あるいはできつつある、というのが「グローバル社会論」です。
- (8) 「完全に出来上がっている」といえるかどうかは別にして、一つの趨勢論としてはたしかにこういう議論をよく耳にします。とくに日本では頻繁に聞きます。そんなイメージを語っても、それほど変わった見方という印象はなく、これも日本の特徴だと思います。
- (9) このように見ると、たしかに冷戦後の世界像については、まださまざまな議論があり得ると思います。過去 20 年ほど議論がなされてきましたが、どのモデルに近くなったかは見る人の目によって、あるいは取り上げる事例によって変わってくると思います。
- (10) 私の見方はすでに述べた通りははっきりしていますが、21 世紀の少なくとも前半の 50 年ぐらいは、どの趨勢が強まるのか、どの流れが最もベースになるのか。これは、私よりもうんと長生きする諸君らが自ら考えてください。ここからようやく、国際政治の勉強が始まると思います。
- (11) 今後、皆さんが何十年生きるかわかりませんが、その間ずっとこのような問題意識を頭に置いてください。
- (12) たとえば、近代世界は英米覇権(アングロアメリカン・ヘゲモニー)の時代でした。その間の世界金融の動きを見ると、19 世紀にイギリスが成立させる金本位体制は、1929 年の世界恐慌で崩壊しています。1944 年のブレトンウッズ体制で再建されますが、1971 年のニクソン・ショックでまた終わります。このような形で金融システムや通貨といった問題は、国際政治の覇権と分かちがたく結びついています。
- (13) 今後もし、この世界金融のシステムに大変化が起これば、国際秩序や世界政治の構造は急速に変わるでしょう。
- (14) これはやはり、軍事力との関係かもしれません。米欧諸国の財政と軍事力は世界秩序に直結しているからです。アメリカとイギリスの共通点は、どちらも英語を話すというところではなく、世界の海軍力つまりシーパワーを一貫して支配している点です。世界の金融も一貫して支配しています。この 200 年、一度も他に奪われたことはありません。
- (15) ものづくりや製造業や世界貿易、あるいは陸軍力、宇宙開発、ミサイル開発、核戦力などでは、アメリカがソ連やドイツ、日本などに圧倒的優位を奪われた時代もありました。でも海軍力と金融支配力は、そうではありません。
- (16) あるいは世界の通信、マスコミ、情報の世界も、19 世紀のロイター通信の時代から、一貫

して英米支配の構造になっています。たとえばこれがどう変わるか、それが今後の世界の方
向を知る着眼点の一つでしょう。

(17) 以上のように、前期の授業は通常の国際政治学のありきたりの教科書的な話よりも、それ以前に現実の世界を考え、歴史の大切さを知ってもらうため、いろんな分野に目を広げて考えてきました。皆さんがそれぞれ関心を持った分野、あるいは得意の分野に議論を敷衍してもらえば、私としてはこの上ない喜びです。

[コメント]

京都大学総合人間学部で 2008 年に行われた中西先生の講義速記録を編集した本書は、長年にわたり国際政治学、外交、文明論の観点から日本人のあるべき姿をお示し下さったもので、示唆に富む。「多強」に残るために「歯をくいしばって粘る」ことが大事と、私は考える。

— 2011 年 9 月 22 日 林 明夫記 —